

# 波

## 本間 真琴

カタカタ、カタカタ。何の鳥が鳴き交わしているのかと空を見上げたら、マリーナの中で風がマストとロープを揺らせる音だった。今日は沖には出ないで、繫留しているヨットの途中でワインでも飲みましょう、と誘われたのだが、意外なことに大森さんは、救命胴衣を二つ提げて現れた。心の準備も間に合わないまま、私と連れ合いは、袴みたいなそれを着て、建築の足場と同じ鉄板の渡り板からヨットに乗り込んだ。

「乗る前に、この板から海に落ちる人がいるんですよ」と言う大森さんの言葉にぎくりとし、私はゆらゆら揺れる板の上を五歩ほど歩いてヨットに渡った。三メートル下には秋の陽をはらんだ灰緑色の海水が揺れていた。

船縁に腰掛け、腕を両脇につっぱって体を支えようとヨットはゆっくりすべり出した。マリーナには緑色の旗が水平にはためいている。「今日は軽風ですね。あの旗が黄色だったら出航注意、赤だったら出航禁止です」と大森さんは教えてくれた。半年前、東慶寺にある一族のお墓を案内してく

れた大森さんは紺色のブレザーを着た初老の紳士だったけれど、今日は洗いざらした半袖のポロシャツと短パン姿で生粋の湘南人の雰囲気を漂わせている。

マリーナを出ると海がひらけた。何艘かのヨットが帆を陽光に滲ませて浮かんでいる。風は穏やかとはいえず、やはり船は上下に揺れ、そのリズムに合わせるために、私の体内ではあちこちの器官がボルトを締めたり緩めたりと調整しているようだった。だから、出がけにした喧嘩や、毎日の仕事や、親族のもつれ合いなどを思い出している余裕はなくなった。果てしなく湧き出す、陽に輝く三角形の波頭と、それに交錯するヨットの舷を見つめているうちに、わずかず、自分が陸地から遠ざかっていることを意識した。保冷バッグから取り出したワインを、大森さんは樹脂製のワイングラスに注いですすめてくれた。「乾杯!」。しかしグラスをテーブルに置くと、たちまち倒れそうになるので、慌てて押さえ、片手は座席を掴んで体を支え、なびく髪の毛は風にまかせる。

色とりどり帆を張ったウインドサーファーたちが、ヨットの近くをザザザと音を立てて滑っていく。そんな場面の大森さんは、慎重な表情になって舵を動かし、「夏の盛りは下手なのが多いですけどね、今頃やってくる人達はみんな上手いから。ほら、あの緑色の帆、彼はなかなかですよ」と言って指差す方向を見ると、黒いウェットスーツに身を

包んだバットマンみたいな男が帆を傾けながらスピードを上げて滑り去った。

風が出て来た。ヨットの上下動が大きくなる。ワインをあわてて飲み干し、グラスを船室の入り口辺りに横に倒して置く。周囲は圧倒的な海で、それが膨らんだり、縮んだりしている。つぎつぎ湧き上がってくる波は、無限の時間が形になって現れているようで、また、時間が消える瞬間を私に示してくれるように思えた。

あの子は、どれだけ波に揺すぶられたことだろう。トルコの砂浜に打ち上げられた三歳のシリアの少年、マイラン君。子供らしく、のどかにお昼寝をしているかのような姿。お願い、起き上がって、小犬みたいに駆け出して、遊びの続きをして。そう叫びたくなる映像だった。内戦のシリアでは国民の二人に一人が難民となり、地中海を渡ってヨーロッパをめざす人々は百万人にもなるだろう。今、この瞬間にも、生きるために四千キロの移動を続けている。ぎゅうぎゅう詰めの船に揺られ、寒さと空腹を抱えて歩き、立ちすくみ、震え、踞り、泣き、眠る。ズキン、と痛みが胃の辺りに走った。ハンガリーのトウモロコシ畑が満州のコーリアン畑に入れ替わる。祖母と、私の叔母や叔父にあたる三人の子供たちが、日本の降伏後、ソ連軍侵攻の満州から引き上げ途上、捕らえられていた収容所を決死の覚悟で脱出し、三八度線をめざし朝鮮半島の山野を徒歩で南下し

ている姿と重なる。祖母は青酸カリを身から離さず、十八歳の美しい叔母は髪を坊主にし顔に泥を塗って男の姿となり、十四の叔父は死んだ人たちを埋める手伝いをし、九歳のその妹もチフスの人たちに便器を運んだ。生還できたのは全体の半数程度の人々だ。今、こうしている私は、満州の原野を歩く私になり、もう一人の私は、地中海をボートで渡る。海流のように自分が拡散してゆく。

「この前、信州に行つて来たんです。風樹文庫っていうのにね、うちの会社が今までに出版した本が全部、収められているんですよ。うちの本は装丁が地味なものばかりでしよ、でも三万六千冊がずらっと並ぶのを見ていたら壮観でねえ、やはり胸に迫るものがありましたよ」

舵を握りながら大森さんは言った。本という、魂の表出でもあるものを、途切れなく、波のように生み出して行く大いなる営為。平和であり文化であるものの象徴。大森さんの胸に迫ったものが、私の中にも広がってくる。

ブルームーン、ユウソウミー、スタンディングアローン。大森さんが口ずさむ。ジャズの話題が連れ合いとの間で盛り上がっている。最初の出会いは、何と言つてもマイルス、例の三部作、クツキン、リラクシンそれから……。連れ合いに目をやると、盛んにあくびを繰り返している。顔は蒼白で、今にも吐きそう。陸までもつかどうか。